少年少女の青春模様

キュウイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年少女の青春模様

【Nコード】

N2620P

【作者名】

キュウイ

【あらすじ】

ごくごく普通の高校生、斬愛黒兎きりあいこくとの日常を描くほのぼの？ストーリー。

彼、斬愛黒兎はノリのいいクラスメイトとの穏やかな生活を送る普通の高校生。しかし、彼には裏の日常があった……

個性豊かなキャラクターが贈る日常と非日常、そんな少年少女達の青春模様を御覧あれ！

ちなみに主人公を一言であらわすと？

「変態」「女装の似合う子」「ドS」「可愛い後輩」「夫」「殺人
鬼」「90%悪意」「AIBO」

「嘘だっ！！」

ぶろろーぐ(前書き)

えつと処女作です！

あんまり激しい批判とかは、勘弁してください〜(泣)

文へた、話短い、遅筆、不定期更新、e t c、こんなんでよければ
付き合ってください！ヨロですっ！

ぶるるーぐ

「こちらAce、状況は？」

『こちらQueen、現在貴方のまわりは、グリーンです』

「了解、ミッションを続行する」

真夜中、町外れの廃工場、その入口付近の錆びれた扉の前。二人の人影がひっそりと佇んでいた。

あたりはしんと静まり返り、雲が月を覆っているからか月明かりがささず、あたかも舞台が始まる前かのような緊張感が漂っている。

今この場所には二人の人間しかおらず、息をする微かな音がまわりに溶け込んでいるだけであった。

「だってよ、用意は良いかい？ Jokerくん」

「黙れ、このリア充死ね」

「ひびっー！」

ひとりの男が嘆く。

調度その時廃工場の中から足音がしてきたらしく、二人の男は黙り込んだ。

じやり、じやり、と砂利を踏む音が廃工場に響く。

足音は錆びた扉、二人の男がいる方へと近づいて来ているらしく、男達はゴクリ、と喉を鳴らした。

じやり、じやり、と砂利を踏む音と、二人の男の息遣いが、その

空間をうめつくす。

じゅり、じゅり……

「……ゴクリ」

ギー……

扉が開く。

「ふっ！！」

「！……！」

ドサッ

「があっ！」

「つつ！よし！」

「い、いって……な、何だてめえら！？」

「黙れ、暴れるな」

「何なんだよ！は、はなせ！くそっ！てめえらどついつ事だ！」

「黙れつつてんだろ……Jokerたのむ」

「ああ」

「なっ！触んな！くそっ！てめえら後で後悔することになっからな

「！」

「！……あつた」

「なっ！おい！てめえ、ふざけんな！返せ！」

「大麻か……」

「くそっ、てめえら何もんだ！？」

「報告する、ケータイよこせ」

「ああ？てめえ持ってんだろ？」

「忘れてきた」

「マジかよ……」

「えーと、ケータイケータイはと……」

「っおらああー！！」

「っおっ！」

「馬鹿野郎！」

「てめえら覚悟しろよ！」

シュッ

「っ！ナイフ！」

「Ace危ない！」

「うおおおおおおお！..！」

「くっ！」

「チッ！」

「ふんっ！」

キイイイイイイイツ！..！！

.....キイン

「.....な」

「ギリギリ.....かな」

「あ、危ねえ〜」

「な、何だてめえ.....何で俺の.....何で俺のナイフが折れてんだよ
お！」

「斬ったんだよバーカ」

「やってくれたなこんちきしょー！お釣りをくれたらあ！」

「な..！」

「ふんっ!」

「がふっ!」

「おしゃっ!」

「ふう、さてさてとケータイをよこせ」

「少しくらい勝利の余韻に浸らせるよ……」

「良いから」

「ったくよお……はいはい、ケータイはっ……ほら」

「サンキュ」

ピ、ピ、ピ、ピ、ピ、プルルル、プルルル……ガチャ

「はい、こちらQueen」

「こちらJoker、ミッション完了。」

「了解、お疲れ様でした。ではまた明日」

「はい、また明日」

ブッ……シューッ

「んじゃ、こいつ警察に突き出して、ちっさと帰るか」

「そーだな」

じゃり、じゃり、じゃり……………

そしてまた廃工場に静寂が訪れる……………

ぶろろーぐ(後書き)

話……短いすよね……

すみませんんんんん!!

1話 事故商会（前書き）

サブタイトルの漢字はあれであっています。はい。

1話 事故商会

こんにちは
はじめまして

えー、突然ですが自己紹介をさせていただきます。

ワタクシ斬愛黒兎きりあいこくとと、申します、姓は斬愛、名は黒兎にございませ。周りからよく「なにその厨二病みたいな名前、笑えるんですけどwwww」やら「ぷっ……コクトって……くっ……どこの主人公だよ（笑）」などと言われます（泣）（だつてだつてー、仕方ないじゃないか！そりゃ俺だつて恥ずいよ？もつと普通の名前にして欲しかったよ？ユウキなんて名前を付けられた人がよっぽどうらやましい……まったく、誰だっ！俺にこんな名前をつけたのは！あつ母さんか……犯人は母さんだつたのか！う、恨む、恨むぞ！この時だけは恨むぞ母さん！）という心の叫びは置いて、歳は今年で17、身長は高くもなければ低くもない。体重の方もほぼ平均という中肉中背男。趣味は読書で特技は……強いて言うなら刃物の扱いが得意だ（手先も器用な方だと思う）包丁捌きは大の得意分野つてね。勉強は中の下で運動はそこそこ、容姿は……まあ、良く言えば中象的でキレイ。悪く言えば「え！？君つて男の子だつたの？」だ（この格好見りゃ誰でも男だつてわかるはず……だよな？）

まあ簡単に俺の事を述べるなら、ラノベ主人公によくある『普通の男子高校生』で十分だろう。以上自己紹介終わりー

と、まあだらだと自己紹介を行ったわけですが、何故俺がこんな長つたらしい自己紹介をしたかと言うと……特に理由は無い、ただの現実逃避である。ちなみに何故、現実逃避をしているかと言うと……つて、何？え？そんな事聞いてない？するか！聞け！黙つて俺の話しを聞きんしゃい、あ？てめえの無駄話にや付き合つてられん？黙らっしやーいっ！この駄文を読んでる時点であんたら全

2話 自己主観世界（前書き）

ここからずっと始まる感じですよ。少しでも良いなと思って頂けたら幸いです。

2話 自己主観世界

私立神栄学園、その高等部二年B組。ここが俺の在籍しているクラスだ。

そして、さっきまで現実逃避していた俺に、現実を突き付ける人物がいた。

あんの忌ま忌ましい数学教師め……
ち・な・み・に 現在数学の時間。

「おい、聞いているのか斬愛」

「は！もっ、勿の論ですよ？先生」

「くだらん洒落はいい。さっさと答える」

「い、イエッサー」

わ、解らない……いったい何の問題をやっていたのか、皆目検討もつかん。まあ、それと言つものも、さっきまでぐっすり寝ていた、というのが原因なのだが……

「どうした？早く答える」

「え、えーと」

こつなつたら最終手段だ！恥を承知で頼むしかない！

後ろの席にいる悪友にアイコンタクトでHELP！と送ってみる、しかしニヤニヤしているだけで助けてくれない。くそう！薄情者めっ！後で殴ってやる！絶対だかな！覚えてるよ！くっ！こつ

なったらやけだ！

「じゅ、15？」

ど、どっちだ！

「……………」

「……（ゴクリ）」

「……いいや、座れ」

「ちょ！いいやって……それだけ！？それに今の間はなんですか！
て言うかあってるんですか！？それとも間違ってるんですか！？ち
ゃんと言って下さいよ！」

「うるさいぞ斬愛、黙って座れ」

「し、しかし……………」

くっ、仕方がないここは黙って座るとしよう。決して周りの視線
が痛かったとかではない、それに座れと言う事は、さっきの解答は
あっていた、という事だろう。

しかし流石俺だな、あてずっぽうで言っても当たるなんて。

「じゃあ藤田、答えを言ってくれ」

「え？あ、はい」

そう言って藤田が立つ……………って！うおおおおおい！！間違っ

んのかよ！言えよ！そして正せよ！間違いがあつたらそれを正すのが教師つてもんだらうがよおおおおお！！

「えつとー」『×』です」

「はい、正解」

普通の応答がこんなに羨ましく思えたのは、これが初めてだよ……

「先生……先生は何故、俺をいたぶるのですか？イジメですか？虐待ですか？それとも趣味ですか？それはもうどうしようもありませんね（笑）俺が先生に何かしましたか？いいえ、してません、断じてしてません！私は、潔白です！」

「うるさいぞ斬愛。俺はお前をいたぶってないし、イジメでも無い、そして虐待した覚えなぞない。ちなみに趣味でもない。そしてお前は、俺が頑張つて授業をしていると言うのにグースカと幸せそうに寝ていやがったよなあ〜さっきまで（怒）」

げ！？ばれてた？

「これは、教育だ 廊下に立ってる」

「先生、笑顔が怖いです（泣）」

結局廊下に立たされたー……はあ

「あつはっはっはwww(爆)」

「笑いすぎだ！このくそ薄情者がっつ！！！」

ガツン！！と一発くれてやった。

「いてえ！何すんだよ」

「黙れこの薄情者が」

そう言っつてパンを一口かじる。

現在数学の授業が終わり、昼飯時だ。俺はいつものように購買でパンを買っつて、目の前にいる悪友と駄弁りながら昼飯をとっていた。

「しかし、お前度胸あんなく、りょうちゃん先生の授業中に寝てる奴なんて初めて見た。」

この目の前にいるむかつく顔をしているのが、俺の悪友の内の一
人で、白崎雄太（きぬむすね）と言う。

身長は平均より少し低めでオールバックの髪型と少し色黒の肌が特徴だ。顔はそこまで良くないが、悪くもない。明るく人見知りしない性格なので友達も多くクラス内でも人気者だ。自称モテ男のイタい奴だが、実際にモテるらしく野郎連中いわく「この顔の何処がいい！！」だそうだ。

弄られる側の人間でボケ担当。

「うっせ、俺だっつて気づかないうちに寝っっちゃってたんだよ」

ちなみに、『りょうちゃん先生』とは、数学教師にして、我らが

2B担任の女教師（25歳独身）だ。

見た目はいいが、性格が終わっているので結婚出来ない。あと最近、生徒に喫煙の事を指摘されまくったせいで、本気で禁煙を考えているらしい。まあ指摘してたのは、主に俺と白崎だが・・・

「ははっ、寝不足かよ」

「さすがに4時寝はまずかったか」

「っーか何？4時まで何してんの？」

「いやなに、本を読んでたらっついで」

「っいつて言える時間じゃないよなそれ」

「そっか？まあいいや、そっついで今日って部活あんの？」

「んあ？ああ、あるよ、あるある」

「そっかあ……あんのか部活」

部活ねえ……

3話 ハーレムの作り方(前書き)

えと……部活は、一応非日常サイドです。

3話 ハーレムの作り方

突然だが、この学校には、部室棟なる物件がある。三階建てで、中の構造は校舎とさほど変わらない。

この棟には、主に文科系の部室が入っており、一階・二階は、ほぼ満室だったりする。しかし、この学校は部室棟の部屋の管理が、かなり曖昧で三階は空き部屋が多く、非公式の同好会などが勝手に使ったりする。

そんな部室棟三階の一番右端……そこに『猫の手同好会』なる同好会の部室がある。

もう皆さんお気づきかと思いますが、一応いつときましよう。これが俺たちの部活です！『あぁやっぱりか』みたいな顔しないでください、あとその『猫の手つて（笑）』って顔もやめなさい。

まあ確かにネーミングセンスが残念なのは確かだし、普通の学校だったら、こんな妙ちくりんな部は勿論、同好会すらないと思うのが普通だと思う。しかし、こんな妙ちくりんな同好会だが、なんと意外な事に知名度がやたらと高い、この学園内だけならず、近隣の学校にまで、この名前は知れ渡っている。

フハハハハ！すごいだろ！羨ましいだろ！と自慢したい所だが、知れ渡ってる名前が名前なので、ここは自重しておこう。

少し話がそれてしまったので軌道修正。

俺達の同好会は、基本的に毎日活動している。活動内容は少し特殊だが、基本的に暇なので、だいたいボケ〜っとしていたり、悠々自適に遊んでいる人が多数だ。

まあなんだかんだいって、俺はこの部活が好きだったりする。

「猫部の皆々全員集合」

「おーッ！」

「お〜」

「おー……………」

「お、おー？」

「……………」

「はあ……………」

前言撤回、このノリには、ついていけない。うん、無理

ちなみに、上から、猫先輩、白崎、副部長さん、部長、マイシスター（下の方）、巫剣さん、俺の順番だ。

「おほほい、おほほい、返事が小さいぞおぬしら〜」

何故かこの部で一番偉そうな猫先輩。本名は天音萌子^{あまね もえこ}。少し色の抜けた茶髪のショートカットが、まるで猫の耳の様に元気に跳ねている。色白で大きなクリンクリンの強気そうな目が特徴的だ。とても可愛いが、いかんせん見た目がまずい、どうみても小学校高学年の幼女にしか見えない。身長も140cmくらいだろう。性格もあいまって、まるで子猫のようだ

と言う事で猫先輩。まあなんちゅーか、安易だな、うん。
あと俺はロリコンではない。

「ぬう、さっきからなにをぶつぶつ言っておるのだ？ウサギ」

先輩は俺の事をウサギと呼ぶ。ウサギは、やめてほしいね、本気で。

「ん？ああいや、何でもありませんよ、先輩と男女交際したら捕まるかな」とかそんな失礼な事考えてませんよ。ええホントに」

「なんだウサギ、貴様ロリコンだったのか」

「はははっ、やめてくださいよ先輩、冗談は貴女の存在だけにしてください。」

「ふははー、残念ながら我が存在は、冗談などではないぞ、なんと言っても私は神だからな！」

「まあ、ある意味奇跡ですね、神様（笑）」

「うむうむ、そうであろうそうであろう、私の存在は奇跡なのだ、そんな奇跡的存在の私の意思により、ロリコンの貴様と付き合ってやる事にした。て言うか付き合え、さっさと私の彼氏になっちまえ。」

「遠慮sh」

「するでない、私とおぬしの仲であろう？」

「知り合い以上、友達未満ですが何か？」

あーだこーだあーだこーだ

「また始めましたね……」

「ですね」

「我が兄ながら恥ずかしいです……」

10分後

「んで、今日は全員来てんのな」

「はい」

「うむ」

普段、それぞれの都合により、全員がこの部室に集まる事が少ないため、今日は珍しく部室が狭かった。

「そっか、んじゃ暇だし会議でもすつか？」

そう言っって頭をかく部長。

「会議するにしても、議題なんかありませんよ？」

部長の方をしてみる。

この猫の手同好会部長で本名不詳のある意味一番謎の人。んで、いつも通りのボサボサヘア、そして、これといった特徴がない。うーむ、謎の人だよ、うん。

「そっかー、議題ねーのかー」

性格もおっとりしている。てゆうか萌える。しかもナイスばでい、うん、もっね、やう、あい。

「で、結局今日は、何するんですか？」

今それを考えていたのだよ？マイシスター（下の方）。

このマイシスター（下の方）こと俺の実の妹である斬愛恋歌何きりあいにんか気にKYだ。歳は俺の一つ下、ここで容姿など細かい説明を入りたい所だが、面倒なので一言で言おう、ようは、俺に似てる。……うん、まあ、色々言いたい事はあると思うが、補足しておく、髪型は黒髪ロングで、身長は女子の平均、普通っっちゃ普通だ。

何故かは知らないが俺達は似ている……らしい。自分じゃわかんないしね。

「うーむ、まあやる事ないんならいつも通りでいいんじゃないか？」

「結局そうなるんですね……」

顔をしかめるマイシスター（下の方）

はて何がそんなに不満なのかね、マイシスター（下の方）？

「でも、私はのんびりするの好きだな」

相変わらず副部長さんの表情は緩みきっている。かわええな

「百合さんは相変わらずですね……」

「うむ、私ものんびりするの好きだぞ」

「ね、猫先輩まで……」

何故か、マイシスター（下の方）が疲れたような顔をしている。何か知らんが、俺も一言いっておいっておこう。

「俺も副部長さんの言った事はすべて正しいと思う」「兄さんは黙っててください！百合さんが好きなのは、わかりましたから！」

何故か睨まれた。なしてそんなにキレるのん？マイシスター（下の方）。

「あらら〜照れてしまいますね〜ポッ」

照れた顔もかわええよ副部長さん！

「なに！？それは許さぬぞウサギ！おぬしは私の物だ！無論、愛していいのも私だけだ！」

誰があんたの物だって？

「あ〜もうっ！うるさいです皆さん。そして百合さんは本気にしないで下さい！あと、兄さんは、誰の物でもありません！」

「あらら〜がっかりですね〜」

がっかりした顔もかわええよ副部長さん！

「いや、私の物だぞ、うむ」

いや、ちげえし。

「所で白崎は？」

「……………」

「部室の隅でなにやってんの君」

「……………誰も、話かけてくれなかった」

「え、あ、ああ」

「……………最初からいたのに」

「ああ……………」

4話 暇潰し遊戯

「あゝ、ねみい」

はつきりしない頭に活を入れ、授業に集中しようとする。しかし、人間そう簡単に生理的欲求に勝てるものではなく、閉じようとしてくる瞼を押し上げる事に精一杯で、結果的に授業に集中する事など出来ていなかった。

「でゝあるからしてゝ……」

相も変わらず、この国語教師の喋り方はゆっくりとされていて、子守唄の如くゆったりと右の耳から入り、左の耳へと抜けて行く。

このまま夢の世界へ旅だとうとした時、後ろから微かな音量で声を掛けられた。

「おい、起きてるか？」

「んだよ白崎、俺の睡眠を邪魔すんな。俺は今から心地好い夢の世界に旅立つんだよ、止めてくれるな。」

ちなみに、俺の席は窓側一番端っこの、後ろから二番目の為、多少うるさくしてもばれないのだ。

「今、一応授業中だかな？ってそんな事より、暇だからなんかして遊ばねーか？」

「んゝまあいいけど、なにかってなにすんだよ？」

そう言つと白崎はニヤリとわらい . . .

「つて、きめえからニヤニヤすんな」

「ひどっ！笑つことすら許されないのか俺は！」

少し涙目の白崎……うん、きもい。

「いいから何かあんなら、早く言えよ。」

そう言つと白崎はこつちをキッと睨んでくる。

「この鬼！悪魔！ひとでなし！」

「いいからさっさと言わんかいっ！とお！」

あつしまった、つい癖で手が出た。

「ぶふう！？」

「おおっと、スマン」

「な、殴つたな……父ちゃんにもなく」「うぜえ」「

「ぐはぁ！？」

「ふう〜いい仕事したわ〜」

「お、お願いだから、最後まで、言わせて」

「んなら最初からさっさと見えよ」

俺が白崎にそう言つと、白崎は、はあとため息をついた。何がそんなに不満なのかね……

「うんまあ、作文ゲーム的な事をしようと思つてな」

「作文ゲームか……まあいいんじゃないか」

作文ゲーム、五枚の紙を用意して、それぞれの紙にそれぞれの人
が、いつ、どこで、誰と、誰が、何をしたか、を書いて、完成した
作文を読み、その内容を楽しもうというゲームである。

「よしっ！んじゃあ早速人数集めでもすつか」

白崎がそう言い、俺が頷きかけたとき、前の席から声を掛けられ
た。

「さつきから聞いてりゃ楽しそうな事してんなーお前達、どうせな
ら俺も混ぜてくれよ」

そういつて笑いかけてきた男、この男の名前は荒城亮太郎^{あらかきりゅうたろう}。長身
眼鏡で坊主頭、超絶ヲタクでイケメン……では、ない。ノリがよく、
性格も明るいのでクラスの中心として、皆を笑わせている。ちなみ
に、白崎よりもいじられ属性が高い。

「あーいいぜーやろつやろつ。」

「うし、んじゃあ後二人だな。」

そう言って周りを見渡す。

うーん藤田は、遠いしな。

そう考えていると、白崎が声を掛けてきた。

「なあ竹宮は？」

「竹宮さん？竹宮さんは……」

そう言っつて隣を見る。

「……………ZZZZ」

……………

「寝顔がとってもかわええです」

「いや、そーゆー事じゃなくて」

もう一度横を見る。

「(コクリコクリ)……………ZZZZ」

「……………」

「……………んんう」

「かわええです、萌え死にしそうです」

「いやうん、気持ちは、解るけど」

もう一度横を見る、とじせらひ目が覚めてほんせりしてゐるじい。

「……ん」

「……」

「……ふわぁ」

竹宮さんと目が合う。

「……」

「……」

「えと……」

「はい？」

「み、見ました？」

「それはもう、天使のようでしたよ？お嬢さん」

「……」

「……」

「ふ、ふわぁぁぁぁ……!」

おっと危ない、慌てて竹宮さんの口を塞ぐ。

「しー！今は授業中です」

「（コクコク）」

うん、相変わらず可愛いね竹宮さん。

この竹宮さんこと竹宮^{たけみや}凧^{なぎ}さんは、このクラスの委員長であり、クラス内きつての癒し系だ。セミロングのふわふわヘアと、いつもにっこりしているしっかり者で、副部長さんと似た雰囲気を持っている。身長は平均より低く、まるで等身大の人形のような。

「うづうづ……は、恥ずかしいです」

「あははは……、まあそれは置いといて、竹宮さんも作文ゲームやらない？」

竹宮さんは落ち着いたらしく、首を傾げている。うんかわええ。

「作文ゲーム？うーん、でも今授業中ですよ？」

「まあまあそんな事言わずにさあ、竹宮が参加した方が絶対楽しいつて。な？」

「俺的にも竹宮さんが参加してくれる方がたのしいかな」

テンション的な問題だね。

「そ、そうですね？うーん、でも……」

竹宮さんが困った顔をする。

ううむ、余り彼女を困らせることはしたくないが……仕方ない、これも俺のテンションの為だ！ゴメン竹宮さん。

「そうかー、それなら仕方がない、さっきの竹宮さんの（かわええ）寝顔を公開するしかないのか」

「ええ！ね、寝顔ですか！い、いつのまに……や、やめてくださいー」

いきなり真っ赤になったと思ったら、次は、慌てだす。

表情がコロコロとかわるその姿は、小動物のようで、とても愛らしい。思わずお持ち帰りしたくなるほどだ。

「えー、でもなあ……竹宮さん、参加してくんないしなー」

「さ、参加しますー参加しますよもう」

膨れてる竹宮さんも可愛いですよ。

「よし、これで四人だな」

「あと一人か」

「うーん……誰かいないかね」

「もっつ」

と、言いつつも全員で白崎の隣の席を凝視する。

「……………」

「「「じー」」」

「.....」

チラッ

「「「じー」」」

「!!--」

「「「じー」」」

「.....な、何？」

「いやなに」

「これといった」

「用事では」

「ないですけど」

「う、うん」

「「「作文ゲーム.....やらないか?」」」

キラッ

「い、良いけど.....」

どうやらシンクロし過ぎて若干引かれているようだ。

白崎の隣の席の人こと仲村なかむら巳琴君みこと。美人系の容姿で、前髪をバツクにした腰まで届く茶色がかつたロングストレートと眼鏡、おでこが特徴的な女性だ。ちなみにチャームポイントは、おでこらしい。

＝ SEISYUN ＝

「よし、五人そろったな」

「んじゃ、始めますか」

「順番どうすんだ？」

「ジャンケンでいいんじゃないですか？」

「そうだねー」

小道具の準備は発案者である白崎が用意し、ジャンケンによって準備を進めた。

「ジャーンケン！」「」「」

ここで一つ豆知識をば。

ジャンケンには、必勝方なるものがあるらしい。人の心理的に勝ちたい時、人はチョキを出す傾向が高いらしい。つまり裏を返せば

グーを出せば勝てるということだ。

by黒兎(まあ白崎からの受け売りだか……………)

「っばあああああ！」

白崎。

「ぐぐぐぐぐぐぐ！」

俺。

「ばあああああ！」

荒城。

「ばあ

竹宮さん。

「パー」

仲村君

「てめえ白崎いいいいいいいいいい！！騙しやがったなこの野郎おおおおお！！」

豆知識とか恥ずい事しちゃったじゃねえかあああああ！！

「うるせえええええええええ！騙される方が悪いんだよおおおおおお！」

あーだこーだあーだこーだ

「おい、白崎、斬愛づるせーぞ、お前達廊下に……」

「「すいませんしたっー！ー！」「」

くっ、白崎め後で覚悟しとけよ……

＝ SEI SYUN ＝

「んじゃあ、順番はこれで」

「ちっ、まあ仕方ねえ」

その後何回かジャンケンを行い、順番が決まった。以下の通りである。

いつ……仲村君

どこで……荒城

だれと……俺

だれが……白崎

何をした……竹宮さん

ふっふっふっ、覚悟しろよ白崎……地獄を見せてやる。

＝ SEISYUN ＝

以下それぞれの視点でお楽しみください。

巳琴 Side

うーん……成り行きで参加しちゃったけど、今授業中だしなー……
……まっ、適当でいいか。

亮太郎 Side

どこで、かあ……まあ、あいつら（白崎&mp・斬愛）のことだから悲惨な事になるんだろっなあ……ま、今回は斬愛の方に一枚噛んでみるか。

黒兎 Side

くっふふふふーっふっふっ……白崎い地獄ってやつを見せ
てやんよお

雄太 Side

黒兎の事だきつと危ない事を考えているに違いない……何とか回避せねば。いやしかし、もしかしたら、素直に楽しもうとか考えているかもしれん！うーん迷う……

凧 Side

今授業中なんだけどなあ……斬愛君も強引だし、はあ……
まあやるからには楽しもつかない。

＝ SEI SYUN ＝

「よっし、皆書けたか？」

クッククク、のんびりしてられるのも今のうちだ……

「ふっふっふ、もちろんさ！」

「俺も終わったわ」

「ん、私も」

「私も終わりました」

「じゃ皆それぞれ読み上げてくれ」

遂にこの時が来たっ！覚悟しろ白崎！

「えーでは『昨日』」

む？存外普通だな。

「次は『この校舎のトイレで』な」

おお、なかなか物騒な単語がでてきたな……
いじめか？タバコか？ふふふこれで白崎を地獄へ落とす布石の
つが出来た。

「よしじゃあ次は俺だな、俺は『白崎と』だ」

「おiiiiiiiiii!!」

「次は？」

「シカト!?!」

「はよせい」

「ぐっ……まあいい俺は『黒兎が』だ！」

「てめえもかあああああ!!」

「黙れええええ!!」

睨み合いで牽制し合う

「」（似た者同士だなあ）「」

「あのお……次、言っちゃていいですか？」

「あ、はい、どうぞお願いします」

「では」

すると青い顔した竹宮さんが……どったの？え？うしろ？

「……………（怒）」

あら？なして後ろに赤鬼さんがいるのん？

あらら？隣の白崎さん、なしてそんなに青い顔してんのん？

「……………言い訳は？」

「「ついカツとなつてやった。

反省はしていない」

「……………廊下」

「「はい」

あ、ハモった……

5話 裏姫天気模様

「うーっす」

「こんちはー」

がちやりと音をたててドアを開けた二人の男は、入って来るなり
気怠そうに声を上げた。

部室の中には二人ほど人がいたが、その片方 - 巫剣さんは振り
向く所か、反応さえしなかった。

もう片方 - 副部長さんは、こちらに振り向きニコツと微笑む。
萌えー

「はい、こんにちは」

副部長さんの笑顔 & amp・間延びしたおっとりう、おいすに、
内心ドキドキしながらも、入って来た男二人こと、俺と白崎は平常
心を装って副部長さんに言葉を返す。

「えー、本日御日柄も良く、た、た、た、体調ももももも」

「完全テンパってんじゃねえか……」

だって！だって！副部長さんだよっ！？

「つつつつつつっ！！」

「解った、解ったから落ち着け」

くそつ白崎のくせに馬鹿にしゃがって！

「くそつ白崎のくせに馬鹿にしゃがって！」

「思考がだだもれだ！」

白崎と不毛なやり取りをしていたせいで、副部長さんが「お茶煎れますね〜」と言ってポットを取りに行ってしまった。

仕方ないので、各々席に着き今日の活動について、まとめる事にする。

「あー疲れたー」

思わずこの言葉が出るほど疲れていたらしく、席に座った途端、疲れがどつと出てきた。

「もはやこれは、お使いレベルだと思うんだよなあ」

それについては俺も同意見だ。だが実際問題、報酬はきちんと貰っているんだし、それについて何か不満があるわけじゃあないから、何とも言えないんだよなあ

「まあ、愚痴を言っても始まんねえよ。さつさとまとめようぜ」

どうやら、白崎も同じ考えに至ったようだ、特に文句を言う事もなく頷いた。

副部長さんの煎れてくれたお茶を飲みつつ、仕事内容をまとめていると、ふとある事に気が付いた。

「そつえば、最近部長と猫先輩見ないなあ」

「あー、それ俺も思ってた」

あり？白崎も知らないのか……………？

まあ、学年も違うし、当たり前っちゃ当たり前か。

「副部長さん、何か知ってます？」

俺がそう言うのと副部長さんは、ちょっと困った顔をしたが、すぐにまたおっとりとした表情に戻しいつもどおりに話してくれた。

「え〜っとうですね〜……………その〜Dクエスト〜なんですすよ〜？」

「「は？」

目が点

「だ、だから〜Dクエストなんです〜！」

「なにいいいいいいいいいい！！！」

「副部長さん萌ええええええええええ！！！」

怒った顔も可愛えええよ副部長さん！

「えと〜あの〜?」

「反応が圧倒的にちげえだろ黒兎てめえ!」

「その〜」

「今一番正直に思った感想だよこの野郎!」

「あの〜……………」

「てめえの脳味噌腐ってんじゃないのか、ああ!」

「……………」

「あんだとてめえ!言つに事欠いて副部」てめえら少し黙ってる!

「……………」

「はい!」

裏副部長さん降臨

うわー眼が怖ー、睨むだけで人を殺せるよあれー

「そこに正座」

「はい……………」

「はぁ、良いですか?」

憂いたため息をつき（憂い顔も可愛ええよ副部長さん!）もとの

表情にもどった副部長さんが説明を始めてくださった。

「ちょうどですね〜五日くらい前に〜、本部からですね〜依頼が来たんですよ〜」

「本部からですか!？」

白崎が驚きの声を上げた。かく言う俺もびっくりだ、本部からの依頼なんてそう来るもんじゃない。

「と、そろそろ話について来れなくなっただと思われそうです読者皆様方、ここでいろいろ説明を入れたいと思います、しかし、少々長くなるのと、大体予想できんじゃないかね?といった理由から、説明形式を少し特殊にしたいと思います」

「うわっ!?!いきなりどうした巫剣!?!誰に向かって喋ってた?」

「まずですね〜、はっ!こんな設定大体読めてんだよ!長々しい話なんざ聞いてられっか!と言う方は〜次回更新の説明を〜省いて読んでくださいね〜、次話にて簡単な説明を入れさせていただきますので〜」

「え!?!姫宮先輩まで!?!何!?!何なの!?!なあ黒兎、二人ともどうしちゃったん〜んでもって、長い文章大歓迎 なんて言うドM!?!…もとい暇な方は、一読よろしくお願いします。」お前もかつ!?!お前もなのか黒兎おおおお!?!」

「『『『それでは、今回はここまで!』』』」

「ねえ!三人とも俺の話聞いてる!?!」

「「「はーはーはー」」」

「ねえってばあああああああああ！！！！！！！！！」

間話 取説紹介（前書き）

設定を細々と説明していきます。

別に読まなくても大して問題無しと思われますので、長い説明が嫌いな方はスキップしても大丈夫だと思えます。

間話 取説紹介

「はい！と言う事で説明を入れさせていたたきます！パーソナリティはこの私、斬愛黒兎と」

「はい〜副部长さんでお馴染みの〜姫宮百合です〜そして〜」

「巫剣凜です」

「」「」よろしくお願ひします」「」

「では〜まず最初にですね〜この猫の手同好会について〜説明しますね〜」

「猫の手同好会、通称猫部。これは、簡単に言うと政府公認の執行機関です」

「表面的には便利屋、まあ万事屋とも言えるが、そんな仕事内容で世間に広く知れ渡っている」

「余り多くは〜ありませんけど〜、他の教育機関にも〜この組織はあるんですよ〜」

「多い所で県に三、少ない所で一、といった所でしょう」

「んでもって、この猫部の実質的な仕事内容だが、この仕事は依頼制だ」

「基本的に〜個人が依頼を各部員に〜もちかける〜という方式で〜

依頼を発注する仕組みになってます」

「仕事があるという事は、その対価があつて然りです。依頼主は依頼を持ち掛けたい部員に個人的もしくは、同好会を通してアポイントメントをとります。そして、依頼主と部員が依頼内容の確認や、報酬についての相談を行います。報酬については基本的に現金での支払いが主流です、しかし、部員が良しとした場合、物品などでも良いということになっています」

「報酬の額についてだが勿論上限がある。依頼は簡単な物もあれば難しい物もある、簡単な依頼なのに報酬額が高い、難しい依頼なのに報酬額が低い、なんて事があつたら頑張つたやつが馬鹿を見る。その為に作られたのがランク制度だ、このランク制度は本部が定めた基準に則り、各依頼をS、Cに振り分けSを最高、Cを最低として分ける事により、各依頼の報酬金額上下限を設定し、報酬金額の不正改善を行なった、と言う訳だ」

「あともう一つありまして、基本的に依頼は個人の仕事になるのですが、それと別に本部からの直接的な依頼が来る事もあるんですよ」

「この場合、部員に依頼の拒否権はなく、余程特殊な理由がない限り、ほぼ強制的に参加する事になります。ちなみに、この依頼の報酬の2割が部員への報酬として支払われます」

「これだけ聞くと、強制的に仕事させられてる様で、嫌なイメージをもつかもしないけど、実はこの部、かなり人気があるんだなこれが」

「確かに強制的な仕事は嫌ですけど、明らかにデメリット

よりメリットのほうが大きいんですよ？」

「デメリット、これは、強制的な仕事ですね。次にメリット、まず政府がバックアップについている、個人的な依頼では、規則に則りさえすれば自由な仕事ができる、そして報酬が現金である。これらの理由から、アルバイト感覚で自由な時に公務員の仕事が出る。こうして見てみると、学生に人気が出るのも頷けます」

「んでもって個人的な依頼をフリークエスト、本部からの依頼をジヨブクエストっつーんだ。依頼に関しては、危険性のあるものの発注は出来ないし、たとえ、クエスト中に事故などを起こしてしまっても、ある程度政府からの援助がある。安心して依頼をこなせるって訳だ」

「フリークエストでしたら、嫌な内容であつたり、報酬金額に不満がある場合は拒否することも出来ますからね」

「そして、たとえクエストに失敗したとしても、部員側には一切責任を問われる事はありません」

「まあ、そうなると、依頼主側が大損する事になるから、いろいろ信用問題的に良くないんだけどな」

「ちなみにここで言う『本部』とは政府文部科学省のえとく、確か、キャッツハンス課？だった様な気がします」

「はい、あつてますよ姫宮先輩。この、あからさまな名前の課が私達猫部の、本部です」

「さてさて、大方語ったかな？」

「はい、大体は」

「ああ、あと一つ補足をしておきますと、この猫部には、入部テスト的なものがあり、入部届けを出したあと、後日各学校にて政府職員を招いて面接と、適性テストを行い、そこで受かった者のみが入部することを許されます。ちなみにこのテストや面接は当日いきなり行われるので、入部希望者は当日までテストや面接がある事を知りません、そのため、軽い気持ちで入部してきた多くの学生が、このテストと面接によって落とされています。まあ、軽いうい気持ちで入部して、受かってしまったゲテ者もいますが……」

「うっ！何故か横から攻撃を受けたぞ……まあ正論だから言い返せないけど……」

「まあまあ、確かに入部希望の権利は一人一回でしたよね」

「はい、この入部試験によって、部員が大量に増えるという事態は防がれました」

「防がれたって……」

「凜さんはあまり大人数になるのが好きじゃないですからね」

「ではそろそろ本題を」

「ああ、うん、じゃ本題をば。えと確か普通クエストでは、危険性のあるものは、発注出来ないって言ったと思うけど、実は例外がある。普通のクエストはCRankQuest、通称Cクエスト、BRankQuest、通称Bクエスト、ARankQuest、通称Aクエスト、通

称Aクエスト、SrankQuest、通称Sクエストがある。しかし、それとは別にDクエストなるものがある。」

「Dクエスト……正式名称は『DangerQuest』でしたよね。」

「はい、Dangerの頭文字Dをとり、一般的にDクエストと呼ばれています。まあどこが『一般的』なのかは、知りませんが」

「そして、このDangerの名の通り、Dクエストとは、表沙汰にならない、危険性のあるクエストだ。個人的なDクエストも発注出来るが、本部を通さなきゃいけないし、表沙汰にならないから、Dクエストの存在自体あまり知られてない。」

「このDクエストは猫部の中でも知っている人が少なく受注出来る人も限られているんですよ。」

「Dクエストを受注するには、プロフェッショナルライセンスProfessional Licenseが必要となります。まあ危険が伴う仕事です。」

「このDクエストは政府からの援助が少なく、ほぼ事後処理のみだけで、完全自己責任になる場合が多い。報酬もそれに比例して相応な額になるけど、リスクもでかい、まあ依頼主とよく相談して、自分の身の丈にあったクエストを選ぶのが得策だろう。」

「Dクエストは、かなりシビアですしね。」

「怪我をしても、命を落としても、政府からの援助は、一切ありません。」

「まあ、そんな内容だから個人の依頼ならぬ事もなかったけど、本部からってのは初めてだ」

「本部からと言う事は強制ですからね」

「まあ、それ程二人の腕が買われているということでしょう」

「まあな……………」

「ちなみに、神栄猫部でライセンスを持っている人は恋歌ちゃん以外全員なんですよ」

「これは、非常に珍しい事です。そう遺憾ながら斬愛先輩も……………」

「何故そこまで……………そんなに俺が嫌いか(泣)」

「そんな事ありません。……………すきだからこそ……………ですよ」

「ん？何か言ったか？」

「いいえ、何も？」

「あ、そう」

「あらら、青春ですね」

「やめて下さい姫宮先輩／＼」

「うぶぶ」

「????まあ、いいや。んじゃ今日はこの辺で・・・」

「お相手はメインパーソナリティ斬愛黒兔と」

「これからも副部長さんをよろしくお願いします〜姫宮百合と〜」

「巫剣凜でした」

「」「」「およろならー」「」

「誰が俺をいじって……………」

6話 LunchTimeにSASUKEを一つ

キーンコーンカーンコーン、キーンコーンカーンコーン

四時間目が終わり、昼を告げる鐘がなる。

昼になれば、やって来るのは飯の時間、二時間目から腹が減っていた俺は、全速力で学食へのスタートを切った。……………はずだった

……………

「っしやー！いいいくぞおおおおおおー！」

『うおおおおおおー！』

場所は体育館。クラスの男子全員がバスケットゴールの前に陣取っていた。

男達は二つのグループに分かれていて、こちらの男達は、円をつくっている、その中心で白崎が叫んでいた。そして、それに合わせて周りの男達も一斉に叫ぶ。

「俺達はああああ？」

『勝あああああつっ！』

正直、いつもは息が合わないクラスの野郎共が、ここまでシンク口していると吐き気がする。

まあ、かく言う俺も叫んでいるのだから、人の事は言えない。
今や体育館の片隅は、異様な熱気に包まれていた。

「Hey! SA!」

『SA!』

「SU!」

『SU!』

「KE!」

『KE!』

『SASUKE!! ひゅうううう!!』

ヒューヒューと喚き始める有象無象。

一体何故こうなった……

遡るは5分前……

＝SEISYUN＝

「っしやー昼だー!」

俺は席を勢い良く立ち上がると、教室の扉目指して走り抜ける、

しかし、もう少しで扉をくぐるといふ所で声がかかった。

「黒兎お!!！」

白崎に呼び止められた俺は不快感を隠しもせず、渋々といった動作で振り向く。

「あんだよ、俺は今腹が減ってたんだ。くだらない用件だったら、貴様の大事な玉を潰」 SASUKE やらないか? 「 Off Cours
re

「 SEISYUN 」

「録でもねえな……………」

本当に録でもなかった。

俺がぼーっとしていたのが気になったらしい、白崎が声をかけてくる。

「おいおい、今からそんなんで大丈夫か?」

相変わらずキモい笑顔を振り撒いて、話かけてくる暑苦しい男がキモい。

「大丈夫だ、お前よりは活躍出来る」

「はっ！言つとけ！」

俺達はスポーツマンらしく握手を交わし、自軍陣営に戻っていった。まあ同じチームだが。

さて、ここでSASUKEについて説明したいと思う。

SASUKE……正式名称SurvivalBasketBallサブイバルバスケットボール、ルール無用の地獄絵図、とにかくボールを唯一のゴールに決めれば良いと言う簡単ルール。

このSASUKEは昼休み全部を使い、己の精神と向き合う神聖なスポーツである。というのは、建前で実際はただ単にカッコつけただけだったりする。

このSASUKEだが、実は他学級だけでなく、他学年にも人気で、これが意外と盛り上がる。勿論女子の皆様もいるので、いい所を見せたい男子達は、相当張り切る、という訳だ。

実際にこれがかきつけとなって交際を始めた男女もいるしね。ちなみに俺がカッコつけた相手は勿論、竹宮さんと副部長さんだ。

「っしあーっ！！気張って行くぞーっ！！」

『おおおおおお！！！！』

さあ、試合開始だ……………

＝SEISSYUN＝

俺達はポジションにつき準備完了、何時でもスタート出来る。
そして、審判が手を挙げる……………

「始めっ！！」

「死ねえええい白崎いいいいいい！！！」

「甘いわ、黒兎おおおおおお！！！」

開始と同時に白崎にとびかかる。

しかし、見抜かれていた様でするりとかわされてしまった。

「やるじゃねえか白崎い」

「そりゃ、五度目にもなりやあなあ」

見ると他の男子達は、既にボールに群がっていた。
わー、まさに阿鼻叫喚ー

「白崎い、ボールだあ！！！」

「おうよう！！！」

そうして俺達は、戦場に繰り出したのだった。

＝ SEISSYUN ＝

「酷い目にあつた」

五時間目、SASUKEによつて身体だけでなく、精神まで疲れ果て、皆一様にぐったりとしていた。

国語教師は、さして気にしたふうもなく、淡々と授業を進めていく。

結局勝敗は分からず仕舞いで、うやむやのまま終わってしまったのだつた。

「嗚呼、無情」

そう呟き、俺は深い眠りに落ちていった。

7話 百合と白兔と赤事情

俺達猫の手同好会はぶっちゃけ政府公認の執行機関だ。

個人的な依頼と本部からの依頼がありS〜Cまでのランクの依頼を受ける事によって報酬を貰う、いわば自由に仕事ができるアルバイト公務員といった所。

だがDクエストという危険なクエストがあり知ってる人が極端に少なく受注出来る部員も、限られていいて、ライセンスを持っている部員しか受注出来ない。

そして本部からの依頼は断る事が出来ない、それなのに部長と猫先輩に本部からDクエスト!?

「余りに理不尽じゃないですか!？」

思わず声が入ってしまった。

副部長さんは、少し寂しそうな顔をした。

「でも〜……………仕方ないんですよ……………仕事ですから〜」

副部長さんの言う事は、最もだ。副部長さんに問い詰めるのも筋違い。

そんな事は、解ってる、でも、それでも、納得いかないものは、納得いかない!

「くっ……………」

怒りの矛先を無くした俺は、悪態をつく。

そんな、俺を見兼ねたのか白崎が声をかけてきた。

「そう、かつかすんな。気持ちは解るがこれは本当に仕方ない事なんだよ。あとそんななるなら何故あの時副部長さん萌えーなんて言ってたんだゴラァ！」

ちっ！根に持つタイプか…………

「ねちねちと根に持つタイプだったのかっ！」

「お前は、いきなり何なんだっ！」

「ねちねちと根に持つタイプだったのかっ！」

「何故二回言っただーっ！！！」

「大事な事だっただですよ〜」

「いや、それ関係な「大事な事なので二回言いました」あってんのかあああああああ！！！」

まあ、仕事なら仕方ない、割り切るか。

「重たい内容でふっといてそれかっ！」

さっきからうるせー奴だなあ。

もう少し静かになんないものかね。

「そうですね〜もうちょっと静かにして欲しいですね〜」

「姫宮先輩！？」

「あと勝手に人の心読むんじゃないやねーよ変態が、白崎変態が」

「何故俺だけ！？今明らかに姫宮先輩も心読んでたよねえ！？」

こいつもしや、解ってないのか？

俺が急に真面目な顔になったからか、急に白崎の表情も緊張で硬くなる。

「な、何だよ……………」

そう言った白崎に、俺は、真面目な表情と酷く落ち着いた声音で言うてやった。

「お前と副部长さんの待遇が、同じだとでも……………思ったか？」

「ですよねーっ！」

まるでトマトの様に、真っ赤な顔で叫ぶ白崎。
うーんパターン化してきたかな？

「て言うかですね、そろそろ毎回ネタに使われてる、こっちの身にもなっってくださいね？」

微妙な顔で、そんな事を言う副部长さん。

別にネタで言うてる訳じゃないんだけどなあ。

「て言うか全部本当の事ですょ？」

「ッッ！ー！」

ありやりや、今度は副部長さんがトマトだ、そんな副部長さんも、
萌ええ

「恐るべし……天然ジゴロ……」

何か知らんが白崎の眼に殺気が籠っている気が……

「ふ、ふふ、落ち着いて、落ち着くのよ百合……あれは違う、家族愛みたいなものよ、だから決して抱き着いたりしちゃいけない……子供みたいに甘えたいなんて思っちゃいけないのよっ！」

一瞬にして裏副部長さん降臨！？怖っ！何かぶつぶつ言ってるし、何より眼が逝っちゃってるよ！

余りに怖くて蛇口を捻った時の様にちびりそうだったので若干距離をとる。

「この女たらしめっ！」

白崎の眼がマジだ！って言うか……

「てめえにだけは、言われたくねえんだよ！この二股野郎がああああああ！」

「ち、違うー！」

俺の魂の叫びを聞いて、おどおどしだす白崎。その表情はかなり必死。

ざまあw

「あらら〜余り白崎君を、イジメちゃダメですよ〜？」

「あ、あれにはきちんとした理由が……………」

いや、んなこと言っただて自業自得ですよ？
しかし……………」

「やっと俺の萌え萌え副部長さんが戻ってきた！」

「もっ！！！！」

「そもそも、俺はちゃんと二人共平等に愛して……………」

しまった、つい本音が……………」

てゆーか何故か、副部長さんが白崎の必死顔に仲間入りしてるんだが……………」

そんな副部長さんも萌え

「もっ！、萌えって！も、もももも」

「大体、デートの回数だって平等に……………あれ？まで、確かこの前行ったから恵理ちゃんのほうが二回多い……………？いやっ！ち、違うんだ別に優遇しようとした訳じゃ……………」

「す、すみません副部長さん」

「へ！？あつ、そ、そうですね！ちょっとからかいたくなっただ
「つい本音が」にゃ……………」

「違うんだ！嘘じゃない！嘘じゃないんだ！うわあああああああ
……………」

随分と混沌カオスな状況になってしまったようだ。
仕方がないので今回はここまでにしよう。
それでは、皆さんご機嫌よう。

「にゃあああああ!!」

「うわあああああ!!」

7話 百合と白兔と赤事情（後書き）

ある事情により、次回の更新が大幅に遅れると思われます（泣）
しかし！時間は掛かりますが、次回も必ず更新するので、今後とも、
なにとぞよろしくお願いします！

8話 現実逃走中（前書き）

遅くなりましたっ！

すいません！

次回も遅くなりそうです（泣）

本当すいません（涙）

ちなみにこのタイトルの読みは『じげんとうそうちゆう現実逃走中』です。

遅くはなりますが、頑張つて次も更新します！

と言う訳で今後もよろしくお願いします！

8話 現実逃走中

昼休み。

俺は逃げていた……………あいつらは鬼だ、今捕まれば命はない。

俺は逃げ続ける……………生きる為に！

荒城亮太郎、17歳。行きます。

「居たぞーっ！階段だーっ！」

「まずっ！」

「捕まえろーっ！」

「くっ！何故こんな事に……………」

そつだこの逃走劇の発端、あれは、五分程前の事だ……………

五分前

「暇だー」

『ドンキーコグー!!』

「うわぁ!?!」

まさかのクラス全員起立だった。怖えよ。

「ってDKだと!?!」

最悪だっ! 思い出すだけでもおぞましい! あのDKだと!

さて、ここで皆さんにもこのDKの恐ろしさを知って頂くため、解説を入れよう!

ドンキーコグ、通称DK。一人の人間相手に、十人掛かりで床に押さえ込み、その手足を封じる。その後、二人の人、間が背中合わせで馬乗りになり、そのうち一人が、手足を封じられている相手の胸板を高速で殴る。

一見地味そうだが、十人掛かりで手足を封じられると、逃げる事など到底出来ない、そして、胸板を高速で殴られるとかなり痛い、じーんとくるのだ、その上胴体に座られているので、身をよじる事も出来ない。

これを拷問と言わずして、何を拷問と言っのか。

何にせ、ここで捕まったら一環の終りだ。ここは逃げるが勝ちだな……………」

そう考えた俺は、逃げる為の態勢を整える。

「んじゃあそう言う事で……………」

斬愛がそう言い……………」

「捕まえる」

逃走劇が始まった。

＝ SEISSYUN ＝

今思えばこれっていじめだよな……
そんな事を考えながらも、階段を駆け上がる。

『まてーっ！』

「はあ……はあ、くそっ！まだ追いかけてきやがる……しつけないだ
よっ……！」

あーまずい、何だかんだ言って、やっぱりクラスの中心は白崎と
斬愛だかな……

まあ仕方がない、ここはどうにか休み時間終了まで粘るしかねえ
か……うしっ！野球部の底力みせてやっか！

「れ、レ たん！！何故だっ！何故お前が俺の イたんを」

おかしい、何故ここにレ たんが！？

確かに家に置いてきたはずなのに！

「ふっ……………こいつがどうなってもいいのか？」

「くっ！ひ、卑怯だぞっ！！」

俺がそう言つと斬愛は声を上げて笑いだした。

「はっはっは、何とでも言ええ！さあこいつの命が惜しくば抵抗をやめろ！」

くそっ！悔しいがレ たんの命には、変えられない。

「くっ……………わかった」

俺がそう言つと、またも斬愛が高笑いを上げる。

「はーっはっはっは、貴様が私達から逃れようなど1000年早いわ
「！」

くっ！レ たんさえ人質に捕らえられてなければ！

「さあ連行しろ」

『はっ！』

いつの間にか後ろまで来ていたクラスメイトに両腕を掴まれ連行される。

なんて外道な主人公なんだ！

「さあDKだ」

そしてクラスのドアが閉められる。

「あぎやあああああああああああああああああああ！……！！！！！！」

今日も平和な一日だった。

9話 猫達の仕事(前書き)

はい、遅くなりました。

約一ヶ月ぶりです。

はい、分かってます、最早言う事は一つですね……………

すみませんしたあーっ！

はい、もう謝るしか出来ません。

はい、分かっております、はい、どんだけおせーんだよって事ですよ、はい、分かってますとも。

でもでも、仕方なかったんですよう！テストだったんです！

うう、もうだめですこのままでは、前書きのくせにくそ長いとかないそつです……………

ひ、一先ず続きは後書きでという事にします！それでは(逃)

9話 猫達の仕事

『あつたかー？』

ケータイ越しに白崎の声が聞こえてくる。

「んあーねえなあ……………」

俺がそう言うと、白崎は、はあー、と大きく溜め息をはいた。

『見つかんねーなー、これでBランクって何か納得いかねー』

確かに、それは俺も思っていた事だ。

俺達は今Bランクのフリークエストを受けている。仕事の内容は、校舎内で無くしたケータイの搜索だ。

まあ確かにこの程度の搜索範囲ならBランクで問題無いのだが、何故が見つかからないのだからこれが。何度もケータイで鳴らしているが、かれこれ二時間は探している。

ちなみに現在位置は二階の理解室前だ。

「まあ、受けちまったもんは仕方ねーだろ。範囲は決まってんだし、探してりゃその内見つかるだろ。」

そう言って、見つかったらまた電話してねー、と言い通話を切った。

「しっかし、本当みつかんねーなあ……………、本当に校舎内にあんのかねこれ」

などとぼやきながらも、搜索を再開する。

クライアートの証言によると、落とした時間帯は、二時間目から四時間目までの時間らしい、ちなみに三から四時間目は移動教室だったらしく、理科室から音楽室に移動したそうだ。

この校舎は理科室が二階にあり、音楽室が三階にある、その為、音楽室から理科室に行くには、階段を使わなければいけない。

これらの事から、搜索範囲は高等部第一校舎の二階から四階までという事になる（クライアートの教室が四階にあるため）、この程度の範囲だと俺達猫部の部員なら普通は小一時間程で探すことができる、のだが……

「ホントにあんのかよ〜」

最初に言った通り、かれこれ二時間は探している。
正直もう帰りがかった。

「よし、帰ろう」

「いや、帰んなよ」

突然背後から声を掛けられた。

何て耳障りな声なんだろう……

「よし、帰」人の話を聞け」

ちっ

仕方ないので振り返る。

リアットしながら。

くる

振り返る音

がっ

ラリアットが当たる音

うぐうっ

白崎が呻く音

ニヤリッ

俺がほくそ笑む音

がはっ

馬鹿が廊下に倒れ込む音

計画通り

やはり私は……間違っ……いなかっ……た……

「よし、帰ろっ」

「だから待て」

ちっ、まだ生きてやがったか、しぶとい奴め……

「あんだよ、見つかったのか？」

そう聞くと、白崎は首を横に振った。

「いいや、みつから」知ってたけどな！」「知ってたのかよ！」

必死顔がキモい

「んで結局何なんだよ、用が無いなら話し掛けんな」

「んあ、まああれだ、なんつーか見つかんねーなと思って」

そんな事は分かっている、だから二時間もこんな所で探しているのだ。

「なんだよ、何があった？」

こいつがこんな言い方をする時は、大概何かあった時だ。俺がそう訊くと白崎は微妙な表情をしながらも話し始めた。

「どうやらクライアントの彼女、イジメられてるらしいんだ、しかも大勢の男子に」

「ほう……………」

イジメ……………ね。

「んでさっきな、調度四階のクライアントが所属している教室前を通った時、話し声が聞こえてきたんだ……」

白崎が言うには、どうやら彼女をイジメているのは、同じクラスの不良グループらしい。そしてその不良グループが彼女の携帯を盗み出し悪用しようとしているらしい。

「成る程、つまり彼女は携帯をなくした訳ではなく、盗まれた、と？」

「そついつ事」

そうかそうか、そんならイジメられてる可愛いそうなクライアン
トを助けてやんなきゃなあ

無意識の内に口の端が釣り上がる、今の黒兎を見たら誰もがこう
思つ事だろう、……………不気味だ、と。

「そんなら仕方ねえ、か弱い女の子の為だ……………」

そんな俺の異様な雰囲気気付いた白崎がニヤリと笑みを浮かべ
る。

「そーだなっ！久しぶりに正義でも執行しましょうかね」

そつしてハイタッチをして四階を目指す。

校舎四階二年E組のクラスの中には、もうとっくに下校時刻は過ぎていくというのに数人の男が集まっていた。

「はははっ！ って事はあれか？あのブス、未だに携帯が無い無言って探し回ってるってか！うけるーっ」

目の前の男がそんな事を言いギャハギャハ笑う。

俺は、そんな男 - 同じグループの仲間である男から視線を移し、今自分の手の中で弄んでいた携帯を見る。可愛らしい装飾のされた淡いいろの、そう、まるで少女が使っていそうな。

実際この携帯は俺の物ではない、同じクラスメイトである一人の少女の物だ。

何故そんな物がここに、と問われれば簡単な事だ。要はその少女から盗んだのだ。大した理解は無い、ただあの女が気に障ったのだ。ただそれだけだ。

しかし、いざ盗んでみたら、思ったより利用価値があるのではと思ったのだ。なぜなら携帯は個人情報のかたまり、情報が重要な価値を得る現代では、これ以上有益な物はない。

そこで仲間を呼んで何に使うか案を出し合おう、という事になったのだ

「しかし、何かいい案は - -」

そこまで言った時だった、激しい音をたてて教室のドアが蹴り飛ばされたのだ。

「な、何だ！？」

突然の事に呆然しながらもドアの方を見る。

そこには神栄高等部の男子制服をきた、二人の男が立っていた。ネクタイの色を見る限り自分達と同じ二年生だ。

「なんだてめえらあ！」

教室に入ってきた二人組に向かって、怒鳴り込む。すると二人組は声を揃え、こんな事を言った。

「我等『白黒矛盾』正義の名の元に、貴様らを断罪する」

その時微かに見えた、二人組の片方の顔が鮮烈に頭に刻まれた。

とても美しく……とても狂喜的だったあの顔を。

9話 猫達の仕事（後書き）

すいません、次回も多分遅いです……

すみませんんんんんんんんん！……！

ですが次回も必ず更新するので、何とぞよろしくお願いします！

10話 男達のSASUKE

「荒城いいいいいいいい！！！！！！」

「白崎いいいいいいいい！！！！！！」

「死ねええええええええ！！！！！！」

そんな怒号と共に、バコオオオン！！という破裂音のような音が体育館にこだまする。

白崎が荒城に向かってバスケットボールを当てようとするも避けられ、荒城が白崎にタックルをかます事で白崎を2mほど吹き飛ばした。

「クハハハハア！哀れなり！白崎い！！」

「ぐう！あ、荒城いい」

そんな会話をしてる間にも白崎の手によって床に打ち付けられたバスケットボールはバウンドして天高く舞い上がり、天井に当たって跳ね返って落ちてくる。

「ざまあ白崎！そして荒城覚悟！！」

俺は落ちて来た所を狙い、ボール確保にむかう。

「なあ黒兎貴様あぶふう」

途中落ちていた白崎を踏み台にして高く跳び上がる。

「くっ、俺は負けん！負けんぞ黒兎おおおおぐう！」

跳び上がった俺とボールの間にいた荒城に向かって、顔面膝蹴りをかまし、そのまま荒城の肩に足を掛け一段と高く跳び上がる。

そうする事により、高い位置でボールをキャッチする。そうして着地。

「完璧だ」

「敵一人、味方一人に多大な被害が出てるけどな……………」

いつの間にか目の前には志水が立っていた。

志水しみず洋介ようすけ。俺達とはクラスが違うのに、当たり前前のようにこのクラスに馴染んでいる一般人面した、かなりの変人第二号。身長は男子の平均つとここで、無難な黒髪に普通の顔立ち、でも変人。

ちなみにこのSASUKEにはバスケットボールと言うだけあって一応チームがある。チーム分けは以下の通りだ。

阿チーム

白崎

俺

藤田

e t c

吽チーム

荒城

浅野

志水

e t c

まあ余りこのチームは役に立たないが……
背後を振り返ると腹を押さえた白崎^{キモイ}と顔面を押さえた荒城（哀れ）
が倒れていた。

「そんな事はどうでもいい！それより志水……お前もそこをどかないと大変な目にあうぞ……」

そういつてキモくて哀れな連中をチラと見る。
志水は苦笑したが、それでも前を退けなかった。

「ほう、俺とやると？」

「まあこれでも一応男なんでね」

そう言つて構える志水。そんな志水を見て思わず口の端が吊り上がる。

いいねえ言つじやねえか……

「いくぞ志水！！」

「こい斬愛！俺の奥義で返り討ちにしてくれる！」

お、奥義だと！……なんて厨二臭いんだキモいな！
だがどんなに臭くてキモかろうと奥義は奥義、俺も覚悟した方がいいな。

「見よ！俺の究極奥義！」

「くっ！」

何が来る！

「森の精霊!!！」

「1UPううう!!！」

よく解らない動きを始めた志水に、全力でローキックを決めた。

「おおおおおおおおおおおお???!?!?!!!!!！」

そうすると志水は疼くまり、自らの脚を押さえながら奇妙な声で唸り始めた。

相変わらずよく解らない奴だ。

そんな志水を横目にしながらゴールまで走って向かう、途中何度も相手チームや味方チームの妨害にあったが、それも難無くかわして行く。ちなみにボールの持ち方だが、勿論ドリブルなどしない。ラグビーの様に抱えるのだ、そうしなければ簡単に掠め取られてしまうから。

そうしてあともう少しの所で横槍が入った。

「まちねい!!！」

「かふっ!!」

いちなり横から抱き着かれた。しかもかなりの勢いで。勿論床に倒れる。

「しまった!ボールがつ!」

「ふははははー逃がさんぞ悪党めっ!」

そう言って抱き着いてきたこの男は浅野翔太^{あさの しょうた}。俺達とはクラスが違うのに、当たり前前のようにこのクラスに馴染んでいる最近不良化した、かなりの変人第一号。身長は男子平均よりも少し低めで、髪の毛を赤く染めている。かなりノリのいい奴。

「くっ!まさかの強敵か!」

「俺達の戦いは、まだまだ始まったばかりだぜい!」

「まだ終わらせるには早いつてか?」

俺がそう問うと浅野は、ニヤリ笑った。

「続きはWEBで……………」

「いやここWEBだから」

「んじゃバイ!次回をお楽しみに!」

「勝手におわらすな」

「んえあ？あ……はい、す、すんません」

10話 男達のSASUKE(後書き)

じ、次回も遅くなっちゃうかもですう

すみませんんんん!!

でもでも、やっぱり次回も絶対更新するんで、よろしくお願いしま
すう!

み、見捨てないでええええええ (泣)

11話 正義罪人(前書き)

はいいい!

遅くなりましたあ!

すいません(涙)

11話 正義罪人

「これより任務に就かせていただきます。田村とお呼び下さい」

「私の事は鈴木とお呼び下さい」

目の前にいる黒服を着た二人の男がそう名乗る。私はそう言った二人に対し深々と頭を下げ、頼む、と言った。

「我等」モノクロバドックス「白黒矛盾」

「承った依頼は必ず成功させると」

「約束致しましょう」

黒服を着た男達は声を揃えて言った。

＝ SEI SYUN ＝

今回の依頼内容はこうだ」とある会社がパーティーをするらしい。その会社の社長は元暴力団だったらしく、今回の依頼主と出会い色々あった末、暴力団を抜けてまっとうに生きる道を選んだらしい。そして成功し、今じゃ若手大物社長となったそう。しかし、暴力団が黙ってはいなかった、その若社長を殺すと脅迫文を送ってきたそう。そして今回のパーティーはまさに絶好の機会。当の若社長も警戒したそうだが、今回の依頼主がそれを心配し、俺達に依頼をした」と言うことだ。

勿論ランクはD。という訳で鈴木こと俺 - 斬愛黒兎と、田村こと白崎雄太が、その若社長の護衛をする事となった。ちなみにそのパーティーには、依頼主である大手家電メーカーの社長 - 藤代^{ふじしろ}氏も参加するそう。

そして今日依頼主とアポをとり、明日の仕事の為に準備をしている所だった。

「さて、どうするんだい田村」

そう言つと田村は、振り返りながら返事を返してきた。

「田村って…………今から使うんかいそれ」

その表情は疲れきっている。

おいおい、一体全体何が不満なんだい？AIBOー

「や、どうせ明日から使う訳だし？どうせなら今のうちから慣れた方がいいんじゃないかと……………思ってますね？」

あー何か気まずいわー。何か田村無言だし、田村の表情どんどん

曇ってくし、何かそんな田村の顔がキモいし。

という訳で殴ってみよう 拳を固めてワン・ツー・スリー！
カウントダウンして田村を殴りにかかる。しかし、当たっていれ
ば顔面HIITしていた俺の拳は、田村に難無く止められてしまった。
ちっ……………

「何故いきなり殴ってきたのかは知らないが、お前のとる行動には
悪意しか感じない」

うん、怒ってるね。

少し機嫌悪そうにする白崎に対し、こちらもつまらなそうに顔を
しかめる。ひとまず殴りかかっていた拳をおさめた。

相変わらず仕事の前の田村は冗談通じないなあ。 仕事中はへらへ
らしてゐるくせに。

「あのなあ、俺達の仕事は一応人殺しだかな？お前みたいに平然
としてられる方がおかしいんだぞ？」

そう言う田村の顔は本当に理解出来ないといった風だった。
俺にとっては今更という感じなんだが。

「だからってお前みたいに一々思い悩んでたって意味ねーだろ？も
う依頼はつけちまったんだ」

俺がそう言うと、田村は少し俯いてから顔を上げた。その顔はす
でにいつもの田村に戻っていた。

「そうかもな……………」

＝ SEISYUN ＝

当日

パーティー会場には既に多くの人が集まっていて、会場内は厳かな空気で包まれていた。

会場内は至る所に円形テーブルがあり、その上には豪華な料理が並べられている。前の方には舞台があり、そこでこのパーティーの主催者であり、今回の仕事の護衛対象でもある若社長が祝辞を述べていた。

そんななか俺達二人は、今回の依頼主である藤代氏の斜め後ろに、スーツ姿で立っていた。

「・・・それでは……………乾杯！」

どうやら挨拶を兼ねた祝辞は終わったらしく、周りも徐々に騒がしくなっていた。

俺達は藤代氏の後続き、若社長のもとへ近づく。

「やあ村越君」

そう言つて藤代氏が手を挙げながら、若社長へ挨拶をした。調度舞台から降りてきた所だったらしい若社長は、こちらに振り向き頭を下げてきた。

「本日は出席して下さいありがとうございます！」

そう言つて顔を上げた若社長の顔は、とても嬉しそうだった。

その後藤代氏と若社長は少しの間雑談をし、藤代氏が俺達を紹介した。

「こちら、田村君と鈴木君だ」

そう紹介されて頭を下げる。

「この二人はうちの会社の有望株でね、紹介も兼ねてこのパーティーに参加してもらったんだ」

田村から若社長に自己紹介をし、それに続き俺も自己紹介をする。

「僕は村越と言う者でね、君らの社長さんには色々とお世話になったんだ。だから君達もなにか困った事があつたら遠慮なく僕に相談してくれ」

そう言つて握手を求めてくる、爽やかな笑顔の若社長に握手を返すと、若社長は、もっとお話してきたいのですが、と言って、最後に楽しんでいって下さいと言って去っていった。

それからは、さりげなく若社長の近くで危険が無いよう護衛をしていた。

しかし、特別大した事もなくパーティーは進行していった。そしてパーティーも終わりが近づいてきた……………

「何かあったか？」

「いや、なにも」

白崎の問いに答え、首を横に振る。

現在若社長は自室にて乱れた服装等を整えに行った所だ。この会場となったホテルは、他のホテルに比べて警備が比較的整っているので、自室に居れば大体安全だろうと言うことで、自室には入っていない。

「ま、何も無ければそれでいいんだけどね」

「確かに」

そんな呑気な事を話した時だった。

「「!？」」

視界が黒く塗り潰されたのは。

11話 正義罪人（後書き）

後日続編を投稿するつもりです。
これからもよろしく願います！

続話 正義罪人(前書き)

多少グロが入ります

続話 正義罪人

暗くなった会場内では、わーわーきゃーきゃーと悲鳴が聞こえてくる。

まずいな、まさか電力ダウンでくるとは…………… そうなると相手にもプロがいるって事か。今はそれより依頼主と護衛対象の安全確保が先決か。

そう考えた俺は、悲鳴の響く会場内で白崎に声を掛ける。

「田村！」

しかし、そう叫んだ所で不意に電気が回復する。

「なんだ？」

隣をみると、白崎も何が起こったのか分からないといった表情をしていた。

何だ？何がおこったんだ？
だがその疑問はすぐに晴れた。

「おいこらぁ！村越出せやこらぁ！」

その言葉に、「こらぁこらぁ」と周りのヤクザが続く。

あらー？極道様御一行招待ー？

うん、あれ多分50人はいるぞ。

そんな事を考えながら隣をみると、流石の白崎も驚いていた。しかし、その顔をすぐに直し、ニヤリと笑う。

「黒兎。お前どれくらいだ？」

その質問に少し考えてから、まあ停電の時間帯から考えて10分くらいかな、と答える。そして右手に持っているナイフを弄る。ちなみにこのナイフはテーブルに置いてあった物を拝借したのだ。

「んじゃあ一人でもいいよな」

「別に最初からお前なぞ居なくても一人で出来るわ」

そう言っただけでナイフを白崎に向けると、白崎は苦笑した。

そうしてから別々に行動を始める。ひとまず俺は依頼主の安全確保だな。

少し俺と白崎についての話をしよう。

Dランクに参加する猫部員は戦闘のプロである事が多い。そして俺と白崎はコンビで動いている。コンビ名は白黒矛盾^{モノクロパラドックス}。うん、言いたい事はわかる。まあ色々あったのだ色々……

白崎はこの業界でもかなり有名な奴だ。二丁の銀製自動拳銃を使い、戦闘は勿論、交渉や戦略、リーダーシップもある。

んで俺はプロでも無ければ有名でもない、ただの一般人……だった。

とある一件から俺を知る同業者は、俺の事を『狂った殺人鬼』なんて呼ぶようになった。

幸い藤代氏はすぐに見つかった。会場内はヤクザの怒号と招待客の悲鳴で満たされていたが、藤代氏は勇敢にも周りの招待客へ避難を呼び掛けていた。

「藤代様」

そんな藤代氏に声をかける。すると藤代氏がこっちに振り返り焦った様な表情で、村越は？と問いかけてきた。ひとまず村越氏には田村を付けたので大丈夫と答えて、藤代氏に避難を仰ぐ。

「あ、ああ、そう「おい！ありあ、あん時の社長じゃねえか！？」なっ！」

藤代氏が避難しようとした時、どうやらヤクザも藤代氏の事を知っていた様で、数人のヤクザがこちらへ向かってくる。

「ちっ！」

舌打ちを一つし、藤代氏の前に立つ。そうしてヤクザ達と対面し、持っていたナイフを握りしめる。

「邪魔だ餓鬼い！」

ヤクザも折りたたみナイフや日本刀、自動拳銃を取り出す。

そんな光景をみながら、吊り上がる口の端を抑える。

ふむ、数は…… 11人か……

そう考えていると、ヤクザの一人がナイフを持って襲い掛かってきた。

「死ねえ！」

俺の身体を穿つために振るわれたナイフを難無く左に避け、持っていたナイフをヤクザAの首へ投擲する。

「かひつ………！」

ナイフは見事にヤクザAの喉へ刺さった。そうして気が逸れたヤクザAの手から折りたたみナイフを奪い、それをヤクザAの目に投擲する。

「あがはっ！！」

ナイフが目刺さり苦悶の表情をする。叫ぼうとするも、喉に刺さったナイフのせいで口からは血が吐き出されるだけだった。

一つ一つの動作におよそ無駄がなく、むしろ美しくも見える。投げたナイフは狙った場所に的確に、そして深く刺さっている事からそれなりに威力がある事もわかる。もはや黒兎の技能は異常だ。

右目からは深紅の涙を流し、口からはびちゃびちゃとおびただしい量の血を吐き出す。そんな血だらけの物体を蹴り倒し、喉からナイフを抜く。

ずちゅ

ナイフを引き抜こうとすると、肉が纏わり付きいびつな音をかなで、喉からは真っ赤な血がゴボっゴボっと吹き出す。辺りは血の臭いで充満していった。

血まみれの物体はしばらく血を吐き出し、ぴくっ、ぴくっ、と痙攣していたが、やがてそれも無くなり、ただの冷たい肉の塊になった。

後ろの藤代氏から息を呑む音が聞こえてくる。

今まで勢いのあった残りのヤクザも、その場に縫い付けられた様に立ち止まり、目を見開いてこちらを見ている。

この恐るべき殺人技能こそが、俺が『狂った殺人鬼』と呼ばれる由縁だ。

俺の先祖には恐ろしい殺人鬼がいたらしい。そして俺はその恐ろしい殺人鬼から、天性の殺人技能を受け継いでいる。だが最初からこんなとんでも才能をもっていた訳じゃない。一年前の春先にちよつとした事件があり、その時に俺は狂った。俺のこの才能には制限があり、刃物を持っている時限定だ、しかも持っている時間も関係があり、持っている時間が長ければ長い程、人間離れしていく。そして、刃物を手放したとしてもすぐに元に戻る訳では無く、一定の時間冷まさなければいけない。

当時は手に入れた力に酔いしれて、半ば無意識に殺人をした。しかし今ではほぼ完全に制御出来る様になっていた。

そんな俺は血塗れのナイフを持ち、ヤクザ達に向き直る。

「さて、どうする？」

無意識のうちに笑みがこぼれた。

＝ SEI SYUN ＝

依頼主を黒兔に任せ、護衛対象の元へ走る。途中何度かヤクザに襲われそうになったが、愛用の銀製自動拳銃 - - 聖母^{マリア}で脚を撃ち抜き、追跡出来ないようにしてやった。

俺の愛用している聖母は、銃身が長方形の形で、他の銃に比べて少し長い。正に名前の通り綺麗な銀色に輝く美しいフォルムをもった自動拳銃だ。しかも二丁。

そうして走っていると、ようやく護衛対象の部屋が見えてきた。今回の相手のなかにはその道のプロがいる可能性が高い。それは先の停電でもわかる事だ、少なくともこんな都合のいい停電は自然にはないだろう。

そうなると会場に乗り込んできたヤクザは囷の可能性が高い、何せ今回の本命は護衛対象だからな。

そう考えながら護衛対象の部屋の前まで来ると、なかからガラスの割れた音が聞こえてくる。

ドアを蹴破り、なかに入ると同時に声を張る。

「Freeze!!」

なかでは黒いコートを着た一人の男が、護衛対象に自動拳銃を向けていた。

「ちっ、ガードか」

コートの男は俺を見るなり、その手に持っていた銃の引き金を引こうとする。しかし、相手が発砲する前にこちらが、相手の銃を撃ちぬいた。

「なっ！」

どうにか弾は護衛対象から逸れ、床を穿つだけにとどまった。ふう〜冷や冷やさせてくれるね！心臓止まるかと思っただよ！流れる冷や汗を拭いもせず、相手に向かって一直線に走り、手に持った聖母で相手の頭部を殴りつける。

「ふんっ！」

「があっ！」

弾が外れた事に驚いていたコートの男は、俺の接近に対応出来ずにもろにくらった。そうして態勢を崩した男にタックルを仕掛け、倒れた相手を床に押さえこむ。

「はあ、はあ………つたく、俺は黒兎みてーに身軽じゃないんだよ」

そう愚痴りながら、聖母の銃口を男の後頭部にあてる。すると男が身震いをした。

「こ、殺すのか？」

そうかすれた声で問いかけてくる男に、そっだ、と平然を装って告げる。

もしかしたらこの男は新人かもしれない。

「悪いな。これも仕事だ。」

そう言つと、男の息をのむ男が聞こえた。

俺だつて無駄な殺人はしたくない。だが仕方ないのだ、これも仕事だから。

猫部のエージェントは、殺し屋を殺さなくてはいけない、それが例え同じ猫部のエージェントだとしても……
引き金に指をかける。

「許してくれ……マシア聖母」

パン！！

濁いた音が鳴り響いた。

＝ SEISSYUN ＝

その後、死体の処理や後処理は猫部関係のサポート班が行い、残ったヤクザに関しては警察に連行して貰った。

パーティーは中止になったが、参加者に怪我等はなく、護衛対象も無事だった。どうやら白崎が頑張ってくれたらしい。

続話 正義罪人（後書き）

はい、次も遅くなりそうです。

.....

はい、すいません（泣）

兎話 人物紹介（前書き）

キャラクター紹介なので、興味の無い人は飛ばしても大丈夫です。
イラストは余り得意でないので勘弁です（泣）
ちなみにまだまだ追加される設定があるかもしれないです。

鬼話 人物紹介

きりあい こくと
斬愛黒兔

> i 2 2 3 1 2 — 2 9 5 8 <

神栄学園高等部

二年B組所属

猫の手同好会所属

軽い毒舌で、ツッコミとボケを兼用できる。

かなりの美形で、少し童顔だが、可愛いと言うよりも綺麗の分類に入る。

本人は自覚していないが、身長は女子の平均より少し上といった所。

恋愛に対しては、かなりどうでもいいと思っているふしがあり、萌えるといっている事はあるが精々愛玩動物に向けるような気持ち程度で、場の空気を読んで男心がどうか言う事はあるが、基本的にどうでもいいと思っている。

中学生時代は、運動神経も一般的なごくごく普通の学生だったが、高校入学後からはとある理由により異常なまでの運動神経をほこっている。本人曰く『狂ってる』。成績は真ん中。

ちなみに、かなりのイケメン嫌いで、イケメンに対しては鬼畜になる。

クールでもなければ、熱血でもない、ぬるま湯系主人公。

12話 表現価値(前書き)

こゝ、今回は少ないかもですっ

12話 表現価値

個性。

今のこの時代、個性の表現方法など色々あると俺は思う。服装しかり、性格しかり、信仰しかり、等等、数えきれない程あるだろう。

そんな数ある個性表現の中で今回俺が言いたいののは、髪型だ。何故こんな事を今回に限って言わにゃならないか………端的に言つと……

白崎が髪型を変えた。

大いにビックリだ。小説キャラクターの癖に個性が安定しない。実に不安定だ。

と、言う訳で今日の議題はキャラの個性です。

「第四回放課後会議！in図書室！」

わーわーパチパチ

拍手の音が図書室内で虚しく響く。

現在放課後の神栄学園図書室内に、とある男子達が円卓を囲んでいる。そして何故かその男達は、皆一様に『かおし』のような仮面を付けていた。かなり不気味である。

「司会進行はこのワタクシ、会員NO.002。アラーキが務めます」

そう言って坊主頭の男が一礼する。

アラーキと名乗った男は円卓を囲う一同を見回すと、おもむろに

話を切り出した。

「それでは、意見を出してください。今回の主題は『個性』についてです」

そう言ってアラーキは、ちらりと後ろに視線を向ける。それに続くように、皆も視線をアラーキの後方へ向けた。

そこには白崎が、白目の状態で椅子に縛り付けられていた。なんと哀れな……

そんな中、一人の男が手を挙げた。アラーキはその男に発言権を許す。

許しを得た赤い髪の男が意見をだした。

「髪型の変更は、キャラクターの設定上いけないと思います！」

その発言に皆一様に頷く、どうやら皆意見は一緒という事らしい。かく言う俺もこの意見には賛成だ。

皆の意見が固まったのを見計らい、アラーキが場をまとめる。

「ではアーサノの意見に賛成の方は挙手をお願いします」

俺は賛成の意を示すため、手を挙げる、それに続き周りも手を挙げていく。

最終的に全員が賛成となった。

「それでは、会員NO.004。アーサノの意見は正統という事となりました」

アラーキがそう言うとパチパチと拍手が鳴り響いた。

白崎は何故か今頃になって大幅なイメチェンをしてきた。なんか

もう、デユラ ラー！の折原 也さんみたいになってる。

そしてそれからも会議は続いた。最終的には白崎には然るべき罰が必要という事となり、その日はお開きとなった。まさに罪と罰というやつだ。

そう言えば何か忘れているような……………、まあいつか。それでは皆様この辺で。

翌日、図書室を開けた図書委員によって椅子に縛り付けられた白崎が発見されたそう。

……………
忘・れ・て・た。てへっ

13話 変体人形

「はわく美人さんです。はふう」

「うむ、さすがは我が夫。うむうむ」

「に、兄さん……」

「あっはっはっは」

「……………」

何故こうなったのだろう。何がいけなかった？何処で間違えた？いや、そもそも何故こんな訳の分からない事に巻き込まれた？何故……………」

俺は女装などしているんだ！？

遡る事1時間前。

「と言う訳で今日は全員来てんのな」

部長がいつもの様に眠そうな目を半開きにして、そう言った。珍しい事に今日は、白崎以外の部員全員が既に部室に集まっていた。白崎もすぐにくるとの事だ。

「それで？今日は何をするんですか？」

相変わらず、空気を読めない事に定評のある斬愛さんちの恋歌さんが、いつもの如く爆弾を投下してくれやがりました。

「……………」

そして一斉に黙りこくる部員一同。

馬鹿だな恋歌、やる事なんぞ最初から無いんだよ。無いからこうして集まっちゃったんだろ？

流石の恋歌も失言だった事に気付いた様で、直ぐに口を閉じる。
今更遅いけどね…………

そんな中、不意に誰かの携帯が鳴り出した。

「あら？何でしょうか？」

どうやら着信が入ったのは副部长さんの携帯だったらしく、鞆からシンプルなフォルムの白い携帯を取り出す。

何もやる事が無く、暇だった俺達は、携帯での会話を始めた副部长さんをじつと見ていた。

それから副部长さんは、三分位通話をした後、おもむろにこう言った。

「今から女装セットが届くそうです」

その言葉を聞いた部員達の目が、一斉にこちらに向けられる。怖っ！！

「な、何です……………か？」

とか言ってみるものの、何の事なのかぐらい安易に予想がついた。なにせ昨日、猫先輩がいらん事を言ったからだ。『ウサギは女装似合いです。』って。

つまり俺に女装しろと？マジ無理。

だが俺のそんな心の叫びなど露知らず、どんどん皆の顔が怖くなっていく！何でそんな口の端吊り上がってるの！？

「なに、一度やってみたかったのじゃよ」

いやいや、やってみたかったじゃねえよ！何考えてんだこの口り猫は！

「大丈夫です、きっと可愛いですから」

そういう問題じゃないんですよ、副部长さん！

「わ、私は別にそういうんじゃないですよ？でもやっぱりここは空気を讀んだほうがいいかなと……」

いらん所で空気読んでんじゃねえよ、恋歌あ！

「あっはっはっは」

笑うなああああああああ！！

かくして……

必死に抵抗するも虚しく、着々と女装させられていく斬愛黒兔がそこにはいた。

「はわ〜美人さんです〜。はふう」

「うむ、さすがは我が夫。うむうむ」

「に、兄さん……」

「あっはっはっは」

「……………」

何故こうなったのだろう。何がいけなかった？何処で間違えた？いや、そもそも何故こんな訳の分からない事に巻き込まれた？何故……

俺は女装などしているんだ！？

> i222689—2958<

いやうん。分かってるさ、動機も何もかも。でもね、納得出来ねええええええ！！

くう〜 は、恥ずかしいっ！何かやたら凝視されてるし！しかも副部長さんの目が尋常じゃない事になってるー！

少し（というか大分）危ない目をした副部長さんから視線を外し、隣にいる恋歌に視線を移す……

「ぶつぶつ………かわいい………ぶつぶつ」

そこには、顔を紅潮させ、うわごとのように何事かを呟く我が妹の姿があった。

うん、見なかった事にしよう。

周りからの視線に堪えられなくなり、少し俯く。

「かわええのう」

くそっ！ロリ猫め！

それからしばらくの間、このおぞましい羞恥プレイは続き、終わる頃には心身ともに尽き果てていた。

「ふむ、これなら問題なさそうじゃの」

ロリ猫が何か言ってるがシカト。もう、死にたい……

そんな事を考えていると、部屋のドアが開き白崎があらわれた。

……一先ずこの鬱の共感者を増やすか。

俺は立ち上がり、女装セットを持って白崎の元へ近づいていったのだった。

13話 変体人形（後書き）

お、遅くなりました……

お許しを（泣）

次回も遅くなりそうです

お許しを（号泣）

14話 SASUKEの真髄(前書き)

お、遅くなりましたああああ

すいません二ヶ月ぶりくらいですかね……

何と云うかスランプです。

次回も必ず更新するつもりですが、遅くなりそうですorz

14話 SASUKEの真髄

「浅野……」

目の前にいる浅野を睨む。相変わらず気配を感じさせずに背後をとるのが上手い奴だ。俺とした事がすっかり油断してたぜ。

「まだまだ甘い黒鬼お」

浅野は動かず、俺から目を離さない。俺も動くに動けない状況だ……
緊迫した雰囲気醸し出すこの空間。はたから見たら、何か異様でオーラのななものを放出しているようにも見える。

だがしかしっ！

俺達は大事な事を忘れてる。

これ……バスケット（仮）ですよね……

俺はちらつと、取りこぼしたボールの転がっていった方に目を向る。

「……………」

勿論ボールは無い。

んで現在ボールがある方へ目を向ける。

「へい！ 白崎パス！」

「うおおおおおい！！ 今本気で投げたろ！ しかも顔狙ってえ

仕方ない。もはや俺の走るスピードはベイビーのよちよちより遅い
ZE あーもうどうすんだよ！ あーもうあーもうあーもうあー
もうあーもうあーもうあーもうあーもうあーもうあーもうあー
こうなったらっ！

浅野の目の前に来た瞬間、スピードをあげ再加速。

「食らえ浅野おおおおお！！ 達苦留っ！！」

ぼす……

「……………」

「……………」

はい、まあ…… かつこよく言ってみた所で所詮ただの体当たり、
確かに体当たりだっつて立派な打撃かもしれない、ポケ ンにだっつて
ある有名な技だ。だがしかし、目と鼻の先30cm程度の助走距離
じゃあ大したダメージなど出るわけがない。結果……

「捕獲完了」

「うわああああああああああああああああ！！！！！！」

捕まりますた。

もう諦めるかな……

「何やってんの、あいつら……」

周りを飛び交うボールを意識しつつ、遠く離れた阿呆二人を眺める。何故かは知らないが睨みあったまま動かず、異様なオーラを纏っていた。

あーそのちみ達い、今はバスケ（仮）中ですよー

「へい！ 白崎パス！」

ひゅっ、と目の前を高速で通り過ぎていくボール。

危ねー！危ねーよ！死ぬ所だったよ！

「うおおおおおい！！ 今本気で投げたろ！ しかも顔狙ってええええええ！！」

パスをまわした相手の方へ顔を向けると、明らかかな殺意をもってこちらを睨みつけていた。

「ちっ……」

な、なんて露骨な……

あまり人の事を言えないような気がするが、そこは勘弁。
一先ず俺にも前科があるので、ここでの仕返しはやめておこう。
周りを見回し、ボールを確認する。

「つしやあ行くぜい！」

ボールは荒城か…… よし！ あいつなら殺れる！

ターゲットを絞ると周りの観客に混じり、荒城に近づく。幸い、
荒城はコートの手前にいる。どうやら見方チームに阻まれて動け
ないらしい。

「ただ裏切られてんだお前は……」

しかし、今は好都合！ 気付かれないように観客のなかを移動し
ていき、遂に荒城の背後にたどりついた。

「アタックチャンス！」

「くそ！ お前らじゃま……… つは！？」

「どうやら気付かれたらしい。だが時既に1秒くらい遅し！」

「覚悟……！」

「狙うは、貴様の股間の付属物だああああああああ！！」

「しらすk……！」

「ゴールデンボールの消失。
荒城は倒れた。」

「「「うわあ………」」」

荒城の死に様をみた敵チームの裏切り物（敵の敵が味方だとは限らない）は自信のそれをも潰された錯覚に捕われ、余りの恐怖に逃げ出した。

南〜無〜

「うつし行くか！」

荒城が取りこぼしたボールを拾い、相手ゴールに向かって走り出す。勿論ボールの持ち方は（ry

妨害してくる奴ら（味方？ なにそれ美味しいの？）を薙ぎ倒し、遂にゴールの下までたどり着く。

よし、このままレイアップだ！

地面を強く蹴り高く飛び上がる。

「この勝負俺の勝ちだあ！」

勝ちを悟った瞬間だった。

「させるかあああああああ！！！」

が、しかし。

あららー何か視界が傾いて行くよーそして腹部に激痛がつー！
ボールはというと、俺の手から離れ、あらぬ方向に……
一体何が？

腹部の痛みの元へ視線を向けると……

「ぞ・ま・あ
「

なんで……なんでお前は、シュートをしている人間に、跳び蹴りをかましてんだよ黒鬼おおおおお！！！！

ああ、地面が遠いや……

続くの？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2620p/>

少年少女の青春模様

2011年9月9日03時31分発行